

## ライフステージをとおして “生きる力の豊かさ”を支えるために……



### 健康寿命の延伸をめざした 口腔機能への気づきと支援 ライフステージごとの機能を守り育てる

向井美恵・井上美津子・安井利一・眞木吉信・  
深井穂博・植田耕一郎 編著／(公財)ライオン歯科  
衛生研究所 編

B5判/216頁 定価：本体 3,800円＋税  
医歯薬出版（2014年11月）

公益社団法人日本歯科衛生士会会長  
評・金澤紀子



歯科衛生士法は1948（昭和23）年に制定・公布されましたが、その前年の日本人の平均寿命は男性50.06歳、女性53.96歳と、まさしく人生50年の時代でした。第二次世界大戦の影響もありますが、いまから思えばなんと短い一生であったことと思います。そして、65年を経た2013年には男性80.21歳、女性86.61歳となり、30年余も延伸しました。この間の経済成長、医学・医療の進歩、生活環境の改善、さらには国民皆保険等の社会保障制度の充実など、さまざまな恩恵のもと、わが国は世界に例をみないスピードで長寿社会を実現しました。

しかし今日、平均寿命と健康寿命との差が広がり、長寿が必ずしも喜びや幸せにつながらない現実に直面しています。人生の最期を迎えた10年あまりの期間は、病気や障がいによって日常生活が制限され、医療や介護が必要な生活を送ることになる

のです。平均寿命を上回る健康寿命の延伸がなければ、この差を埋めることができません。健康寿命の延伸は国民の願いであり、保健医療従事者の最大の課題ではないかと思えます。

歯科衛生士はこれまで、歯科疾患の予防・治療や口腔衛生改善等の“器質的ケア”において大きな役割をはたしてきました。今後は、これらの器質的ケアに加えて“機能的ケア”に対応することが求められており、疾病中心から、生活を支える機能やQOLの向上を目指して支援と連携の輪を広げる必要があります。

本書は、そのような観点から超高齢社会において歯科衛生士が果たすべき役割を明確に提示しています。特筆すべきことは、妊娠期・乳幼児期から高齢期まで、ライフステージごとの口腔機能への気づきと支援をまとめた最初のテキストであることです。発育成長期の発達支援、学齢期における生きる力の育成や成人期の自助・自立支援、高齢期の廃用・虚弱への支援、そして要介護者、有病者への連携支援、さらには“End of Life期”の支援など、ライフステージのあらゆる場面における口腔機能への気づきや支援がていねいに書かれており、全編をとおして編集・執筆者のホットな思いが伝わってきます。関連文献も網羅され、各章のタイトルに応じて「気づきのポイント」、「支援のポイント」、「ワンポイントアドバイス」がわかりやすく表示され、読者への配慮が感じられます。

本書をとおして、歯科医療が、疾病のみならず、口腔機能の発達・育成から未病やフレイルにも対応し、“食べる喜び”とともにQOLを支える医療であるとの認識を新たにすることができます。超高齢社会を生きるとはどのようなことなのか。高齢になることは多様性を増すことであり、この多様性への対応が“生きる力の豊かさ”ではないかと考えます。このような役割をはたすために歯科衛生士は変わらなければならない。そのことに気づくための一冊ともいえるでしょう。